

自己評価報告書(最終報告)

報告者

幼年発達支援コース／木村直子

■平成25年度の目標に対する自己点検・評価

I. 学長の定める重点目標

I-1. 教員養成大学教員としての授業実践

中央教育審議会は、「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」答申したが(平成24年8月28日)、その中で「教員を高度専門職業人として明確に位置付ける」と提言している。この答申の考え方を実現するため、教員養成大学に籍を置く教員として、将来、教師を目指す学生に対してどのような授業実践を展開すればよいか。あなたの取り組みを、①授業内容、②授業方法、③成績評価の三つの観点から示してほしい。

1. 目標・計画

中央教育審議会「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」(平成24年8月28日)には、これからの教員に求められる資質能力を三つ挙げられている。第一に、教職に対する責任感、探求力、教職生活全体を通じて自主的に学び続ける力である。第二に、専門職としての高度な知識・技能、第三に、総合的な人間力である。学生が授業を通して、これら三つの資質能力の基盤形成を行えるよう、私の授業では以下のように取り組む。

①授業内容: 専門職としての高度な専門的知識を提供する。実践力や技術の基盤となる知識や専門職としての価値観形成に寄与できるような情報を提供する。

②授業方法: 総合的な人間力の向上を目指し、授業内での討論やライブスーパーヴィジョン等を取り入れた対話型の授業を行う。特に討論については、学生同士が他者の意見を尊重しつつ自分の意見をきちんと表現できるように取り組んでいきたい。

③成績評価: これまでもオリエンテーション時に明確な評価基準を学生(学部生・院生)とともに設定し、自分たちの授業であるという主体性を育むよう努めてきたが、さらに今年度は授業時間外における予習復習の習慣を身につけ、自主的に学び続ける力を成績評価の対象としたいと考えている。

2. 点検・評価

教員養成大学教員としての授業実践として掲げた年度目標は以下のように遂行した。

①授業内容を刷新し、実践力や技術の基盤となる知識や専門職としての価値観形成に寄与できるような情報を提供した。

②授業方法: 総合的な人間力の向上を目指し、授業内での討論やライブスーパーヴィジョン等を取り入れた対話型の授業を行った。特に討論については、学生同士が他者の意見を尊重しつつ自分の意見をきちんと表現できるように、教員がグループダイナミックスの手法で関わった。

③成績評価: これまでもオリエンテーション時に明確な評価基準を学生(学部生・院生)とともに設定し、自分たちの授業であるという主体性を育むよう努めてきたが、今年度は授業時間外における予習復習の習慣や自主的に学び続ける力を成績評価の対象としたことによって、学生及び院生の授業に臨む姿に変化が見られたように思う。

今年度は、授業の構成及び授業展開、履修している学生個人及び全体の到達度への配慮など、これまでの年度以上に力を入れて行った。そのことが、学生からの高い授業評価につながったのみならず、学生の自主的な予習の定着という形で成果が表れてきているように思う。

Ⅱ. 分野別

Ⅱ-1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

○学生が主体的に授業に参加できるよう、討論やライブスーパーヴィジョン等を取り入れた対話型の授業を行いたい。
○複数担当の授業に関しては、講義内容の関連付けができるよう、具体的かつ実際の連携を図る。
○学生の進路、学習や将来に関する悩みなどに随時応じることによって、学生の充実した教育環境を整えるよう努めたい。
○教授・准教授の先生方から教育・学生生活支援の方法を学び、今後の教育・学生生活支援のあり方に役立てたい。
○ゼミに所属する学部学生及び院生が高度専門職業人として社会で活躍できるよう、実践研究力をつけられるよう研究及び論文指導していきたい。

2. 点検・評価

教育・学生生活支援として掲げた年度目標は以下のように遂行した。
①学生が主体的に授業に参加できるよう、討論やライブスーパーヴィジョン等を取り入れた対話型の授業を行った。学生個々人の到達度のみならず本人の特性等にも配慮し、発問することで、全ての学生が主体的に授業に参加できたように思う。
②複数担当の授業に関しては、講義内容の関連付けができるよう、具体的かつ実際の連携を図った。また、異なる担当教員の実施する授業と連動させ、他の教員と連携することで、学生の教員としての全人的な支援につながる手掛りとなったように思う。
③学生の進路、学習や将来に関する悩みなどに随時応じた。
④ゼミに所属する学部学生及び院生が高度専門職業人として社会で活躍できるよう、丁寧な研究及び論文指導を行い、学部3名及び修士3名の論文が完成した。今年度は、指導教員となってる学生数も多かったが、現場に出てからも学び続けることのできる専門職業人となれることを目標に指導を行った。

Ⅱ-2. 研究

1. 目標・計画

○研究結果の公表・公開を積極的に行う。
○学内外の研究助成の公募に積極的に申請し、特に学外資金の調達に重点を置く。
○講座の教授・准教授の先生方の研究を参考にして、幼年発達支援講座の講師として適切な研究テーマにより、研究を進める。
○学内外の先生と連携して、幼年発達支援コースの学部生・院生、さらには地域の関係機関に還元できるような研究テーマに取り組んでいきたい。
○研究結果の公表・公開の一環として、著書の執筆に取り組みたいと考えている。

2. 点検・評価

①文部科学省科学研究費若手研究(B)が採択され(研究代表者)、積極的に研究を行った。
②兵庫教育大学他他大学の教員と共同研究、共同実践を行い、積極的に研究を行っている。
③昨年度学長裁量経費で実施させていただいたプロジェクト研究を、形を変えて、今年度も継続している。
④今年度は、所属ゼミの学部生や院生とともに、積極的に地域の関係機関と連携し、研究を行った(具体的には鳴門市健康企画室、NPO法人子育て支援ネットワーク徳島、鳴門市子育て支援拠点(うずしお保育園)、徳島市保育課など)。

Ⅱ－3. 大学運営

1. 目標・計画

- 学部教務委員として、学部のカリキュラムや長期履修大学院生のカリキュラム、また全学的に開設している保育士養成のカリキュラムについて、整理し、円滑な教務運営ができるよう努める。
- 大学運営に関して積極的に関心を払う。
- 講師という役職上、大学運営等に関しては、知識や経験も浅く、主体的に動くことは難しいが、積極的に講座の教授・準教授に指示を仰ぎ、前向きに取り組みたい。
- 大学院の定員充足のために、自分の立場でできることを考え、前向きに取り組みたい。

2. 点検・評価

- ①学部教務委員として、学部のカリキュラムや長期履修大学院生のカリキュラム、また全学的に開設している保育士養成のカリキュラムについて、整理し、円滑な教務運営ができるよう、書類等を整理し、ファイリングした。
- ②コース内の他の教員と、幼保一体化推進の流れを踏まえて、今後のカリキュラムについて積極的に議論した。
- ③大学院の定員充足のために、保育所及び幼稚園教諭に積極的に働きかけた。
- ④現職で働く学部の卒業生に、大学院進学を勧めたり、夜間の大学院の案内をするなど、積極的に働きかけた。

Ⅱ－4. 附属学校・社会との連携、国際交流等

1. 目標・計画

- 幼稚園や保育所、子育て支援センターにおいて発達障害の早期発見及び早期療育について助言したり、実施する機会をもつ。
- 幼年発達支援という講座の冠に適した地域貢献を実行する。
- 講座の教授・準教授の先生方の附属学校や社会との連携活動の方法に積極的に関心を払い、それを参考にし、今後の自分の活動に役立てたい。
- 附属学校教員との連携に関する具体的な活動に関しては、講座の教授・準教授に積極的に指示を仰ぎながら、前向きに取り組みたい。
- 公開講座や大学内の赤ちゃんサロンのみならず、地域の幼稚園や保育所、子育て支援センター等での子育て支援を積極的におこなっていく。

2. 点検・評価

- ①徳島県シルバー人材センター主催の保育サービス講習会において「発達障がい」をもつ就学前の子どもへの関わりや保護者への支援について講演を行った。
- ②鳴門市子育て支援拠点(うずしお保育園内)において、出張ベビーケアマッサージを行うとともに、乳児とその保護者への子育てに関する相談等にのることによって、地域の子育て力の向上に繋がるよう努力した。
- ③教育支援アドバイザーとし鳴門市うずしお保育園へ出向いた。
- ④昨年度から実施している「赤ちゃんサロン」地域の0歳児とその保護者を対象とした子育て支援活動を継続し、より発展的に実施できた。その中で、乳児からの学びの連続性や乳児の自発的な学びという新たな研究テーマの芽を育んだ。
- ⑤公開講座「ベビーケアマッサージ」や鳴門市子育て支援拠点へ「出前子育て講座」を通して、0歳児とその保護者を対象とした子育て支援を行った。
- ⑥鳴門市の男女共同参画事業「地域の子どもたちを見守る「イクメン」養成・活動強化事業の検討委員としての職務を全うした。

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)

本年度に関しては、学長の定める重点目標を踏まえ、学部学生及び院生への授業及び論文指導のための個別ゼミに力を注いだ。これからの教員に求められる資質能力を基盤とした高度専門職業人として、学生が現場で活躍できるよう、現在できる限りの指導および学生生活支援を行った。その結果、学生の学びに対する主体性や授業に臨む姿勢に良い影響を与えられたように思うが、そこには多大な時間と労力が必要であった。高度な専門職業人を養成する教育的要素と、大学教員として求められる研究者としての資質能力を向上していく要素、そして地域の各機関(幼年の場合、各子育て機関)と連携していく社会貢献の要素、これらの要素を質高くバランスよく実施していくことが、今後の課題である。